掲載日:2024年08月28日，面名:社会，記事ID:KIJ20240828_01004000100215008
(C)下野新聞社　無断複製転載禁止。

肺正常化へ新治療実施

獨協医大が国内４例目

気管支にバルブ、負担軽減

獨協医大呼吸器外科学などのチームは27日までに、呼吸機能が低下する「慢性閉塞性肺疾患（ＣＯＰＤ）」の重症患者に対し、気管支の中に専用のバルブを入れることで過膨張した肺を正常に戻す手術を実施した。手術は5月に行い、国内４例目だった。執刀医の同呼吸器外科学講座の中島崇裕准教授は「患者側の負担が少ない手術。治療が広まり、困っている方の助けになりたい」としている。

中島准教授によると、ＣＯＰＤは肺の炎症性疾患で、２０２１年の男性の死亡原因の9位に当たり、国内では40歳以上の５３０万人が罹患しているという。症状は体を動かした時のひどい息切れやせきが慢性的に生じる。

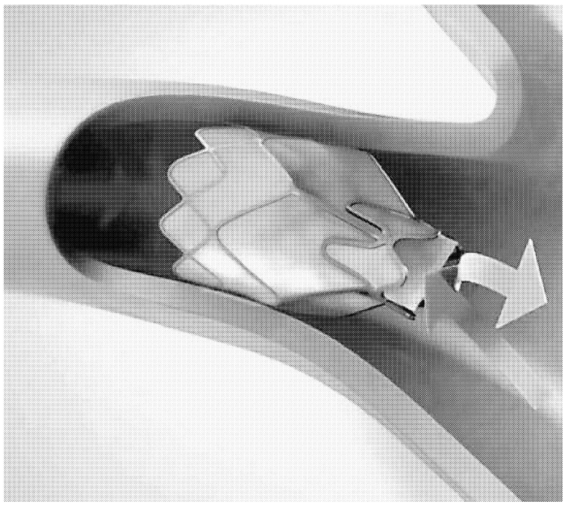
投薬や呼吸のリハビリテーションなどの治療が中心で、重症患者は肺の一部切除や肺移植の必要な場合があるという。

今回は同病院では初めての手術で肺の膨張を抑える「経気管支肺容量減量術（気管支バルブ留置）」を行った。重さ1㌘以下で金属とシリコンでできた小さなバルブを内視鏡手術で気管支に挿入することで、空気が肺に入らなくなり膨張を押さえる効果がある。

世界では10年ほど前から導入され、国内では聖マリアンナ医大病院（川崎市）で4月に1例目が行われた。23年12月に保険適用され、十数の医療機関で対応が可能という。

獨協医大では5月中旬、県外の60代男性患者に実施。男性の呼吸器機能は正常な人の2割以下の重症だった。手術時間は40分ほどで、バルブを5個入れた。術後はリハビリを経て2週間後に退院。患者は「体を動かしたときの息が楽になった」と話したという。

気管支バルブ留置では患者の負担や術後の痛みが格段に低減され、手術のリスク低下も期待されるという。中島准教授は「今後は治療が広く安全に行われるようになり、患者のメリットが増える。治療を諦めている患者もいるはずで、今回の治療方法などについて認知度を高めたい」と語った。（柳木澤良太）



気管支にバルブを留置し過膨張した肺を正常に戻す手術のイメージ図。肺に空気が入らなくなる（パルモニクスジャパン提供）